流通・通

# 一杯のコーヒーに、学ぶ。

**最近コーヒーが静かなブームをよんでいる。カラダにいいとか、ストレスに効くとか…。そういえば、かつてタバコを嗜好していた筆者には、コーヒーの残り香とタバコの口あたりに同じ匂いを感じていたことを思い出す。さて、今号の『流通・通』は、街角から姿を消しつつある喫茶店の話題から。**

## レトロな雰囲気に酔いながら‥

まずはお隣、青森県のお話を。コンパクトシティの成功事例として全国から視察者が絶えない青森市駅前地区、その一角に珈琲茶館「麦藁帽子」がある。店構えはいたってベーシックで、ややレトロな雰囲気をかもし出している。ドアを開けて店の中へ足を踏み入れると、不思議となぜか店の奥へといざなわれる。外光の明かりが照らす入り口付近に比べ、店の奥はしっとりと沈んだアンダーな空間。それが妙に落ち着きを誘うのだ。古びたソファーはダークなエンジ色。そう、昔懐かしい“純喫茶”の装いなのである。この店、昭和50年代にオープンしたそうで、今は食品関係の店舗を展開する地元企業が経営しているという。

筆者が尋ねたのが休日ということもあってか、家族連れの客が多かった。家族連れといっても、成人が老いた両親を伴っての“家族連れ”である。おそらくその昔の若かりし頃、二人でデートした純喫茶を思い出しているのかもしれない。うれしそうにストレート・コーヒーをすすっている。店員はみな20代風だ。だからといって、古風な店の空気を壊すことはない。コーヒーは一杯一杯サイフォンで点て、客のテーブルでサイフォンからカップにコーヒーを注いでくれる。レジカウンターでコーヒーを受け取り、慌しくせきたてられるようにコーヒーを飲んでしまう現代風の店では味わえない趣がある。

## 熟練の手さばきに魅せられて‥

お次は東京・銀座のお話を。筆者がお気に入りの一店が、自家焙煎「十一珈琲店」である。雑居ビルの1階にあるうなぎの寝床のような細長い空間に、カウンター席と若干のイス席が並んでいる。その名のとおり、コーヒーはすべて自家焙煎で、客の注文をうけてから一杯一杯豆を挽き、ドリップで静かに泡立てながら丁寧に淹れてくれる。真空管アンプと思しきオーディオから店内にはJAZZが流れているのだが、この店には音楽よりもリズミカルで脳裏に心地よい“BGM”が響く。カラカラン、シャー、ガーガー、トントン。小瓶からコーヒー豆を天秤量にのせ、ミルに移して、豆を挽き、挽いた豆を受け皿からドリップに落とす一連の音が、見事なリズムとなって店内に響くのである。その流れが熟練した技というべきかスムーズで、一定のリズムを刻んでいる。

筆者にはその手さばきを眺めながらコーヒーを待つ時間が、実に楽しい。客の注文を一つひとつこなすため、注文してからカップが運ばれてくるまでそれほど混んでいなくとも15分から20分ほどかかる。それでも一杯一杯コーヒーを点てる“BGM”を聴いていると、けっして飽きることはない。せわしない毎日をすごす生活の中で、日常とは異なる時間の流れを感じるひととき。街角で味わえる小さな贅沢とはいえまいか。一杯のコーヒーの点て方、コーヒーのぬくもりと香りを堪能させてくれるさりげない店員の応対。こうした装飾のない無意識のサービスこそ、飽食の時代に求められる“もてなし”なのではないだろうか。そんな思いを北と南の街角で味わった一杯のコーヒーが教えてくれている。

## さりげない主張とリズムを大事に…

さて、この二つのお話。どんなメッセージを伝えてくれるのだろう。店にはそれぞれリズムがある。それを心地よく感じれば客はリピートしてくれるわけだが、主張しすぎると鼻につくし主張がなければリズムはうまれない。その手加減が難しい。客に迎合するわけでもなく客に押しつけるわけでもない、さりげないこだわり。その加減を見つけることこそ、常連客を育てるコツなのである。

**経営コンサルタント　岩渕公二**
（ジーベック代表取締役）

**産業情報いわて**　2005年10月10日（毎月10日発行）
発　行　(財)いわて産業振興センター
〒020-0045　盛岡市盛岡駅西通2丁目9-1（マリオス7階）　TEL.019(621)5380　FAX.019(621)5480
E-mail joho@joho-iwate.or.jp　URL http://www.joho-iwate.or.jp/
編集印刷　川嶋印刷(株)

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。
PRINTED WITH SOY INK